絵巻物と工芸

高　橋　隆　博

近年、「絵を読む」ということが流行している。ここ十数年来の傾向である。文献史料だけでなく、画中資料を積極的に取り入れて、「歴史の実相」により迫ろうとするわけである。絵巻物が主として中世における寺社や公家・武家の建築から庶民の住居、調度や家具、風俗、さらには飲食器などを端的に提示してくれる恰好の素材であることにかわりはなく、それぞれの階層の生活の様相をうかがう上で、かけがえのない資料である。これまでも、鈴木敬三氏の著書『初期絵巻物の風俗史的研究』に代表されるように、おもに風俗や服飾研究の観点から行われてきたのだが、調度や器物についてはほとんど取り上げられてこなかった。ここでは、『酒飯論絵詞』を通覧し、中世末期における飲食器や厨房具などの実相をうかがってみよう。

『酒飯論絵詞』の内容は、大上戸の造酒正糟屋朝臣長持、最下戸の飯室律師好飯、中下戸の中左衛門大夫中原仲成の三人が、それぞれ上戸、下戸、中戸の弁を述べる形で展開するもので、詞四段、絵四段から構成されている。この作品は、室町期における座敷飾りや服飾をさぐる上で、多くの好資料を提供してくれるばかりでなく、「酒飯論」という主題に応ずるさまざまな飲食器が描かれており、工芸史の研究にとってもみのがせない。ただ、原本の所在がわからず、これまでは、京都の三時知恩寺蔵の筆者未詳の模本(江戸期)、そして東京国立博物館蔵の土佐養信筆模本(文化七年作)と狩野雅信筆模本(明治十三年没)の存在が知られていただけであった。最も古いものは三時知恩寺本なのだが、三模本ともに、室町末期の原本に基づいて描かれたことが推測されてきた。ところが近年、これの原本が見い出され、はからずもそれに接する機会があった。ここに、『酒飯論絵詞』を取り上げた最も大きな理由である。

なお、詞書については、『群書類従』に「酒食論」として採録されており、その末尾の注記に、「右酒食論者不知何人作也　或曰後成恩寺禅閤之戯作」とあり、室町中期の公卿で、政治論『樵談治要』の筆者として知られ、関白の地位まで昇った一条兼良ではないかとみなされている。

『酒飯論絵詞』には、食事風景が三場面と厨房の様子も描かれている。まず、食事風景からみていこう。床の間のある座敷の酒宴では、糟屋長持はじめ、烏帽子に垂直姿の三人の男性、僧侶一人、鼓と笛を手にする者三人、鼓に合わせてもろ肌脱いで掛け合いに興じる二人、あわせて十三人の宴席を描く(二段)。垂直姿の男の前には、白木の角切り折敷と白木の三宝が置かれ、それぞれに素焼きの杯がのっている。給仕役の若者の前には、黄漆の地に朱漆で文様をあらわした鉢と菜や菓子を盛る三つの小さな折櫃が置かれてある。漆器の鉢は、中国の彫漆器であろうか。折櫃は白木の薄板を折り曲げてつくり、足を打っている。酒器には、金銅製の長柄の両口銚子が使われている。床の間には三幅の絵画がかかり(室町期では、五幅か三幅が通例である)、床板には一対の元か明製の青磁花瓶が置かれており、これは薄緑の地に白線の文様が描かれており、おそらく浮き彫り文のある天竜寺青磁であろう。

飯室律師好飯が、僧侶と童と三人で飯を食べる場面では(三段)、三人の前に、大小二つの白木の三方が置かれ、上に飯椀や汁椀などがのっている。給仕役の僧が両手でささげもつ飯の入った鉢は、蝶形をかたどった足付きの朱漆塗の鉢である。食器と鉢はすべて内外ともに朱漆塗のもので、根来塗と呼んでいる朱漆器であり、これと同じ形の朱漆器は多く現存している。

縁側には、水をはり、マクワウリを浮かべた鉢がある。外側に木目がみえているが、おそらく内側に朱漆を塗った鉢であろう。なお、三方とは、台部の三方向に刳形をあけたところからついた名称で、四方とともに衝重の一種である。座敷の続きの間では、茶釜が風炉にかかり、傍らには朱漆塗天目台がある。台にのる茶碗は、天目茶碗が通常なのだが、ここでは白磁か青白磁の茶碗のようである。



『酒飯論絵詞』

中原仲成が、二幅の絵の掛かる床の間を背に、烏帽子と垂直姿の二人の男と食事をする場面では(四段)、低い足を付ける大小二つの白木の角切膳と白木の小さな角切折敷が置かれ、その上に朱漆の飯椀と汁椀、それに陶器の小皿などがのっている。床板には一対の青磁の花瓶が置かれ、花を活けてある。この青磁器も中国製である。給仕役の女性は、金銅製の長柄の両口銚子を持ち、もう一人の男性の傍らには飯器が置かれるが、これは外側に木目をみせる轆轤挽きの鉢で、内部に朱漆を塗り、蝶形の足をつけたもので、こうした漆器も室町期に比定される漆器にしばしばみられるものである。桶造りの指樽の置かれる控えの間では、大型の三方に果物を盛る男と、鉄製銚子から金銅製の銚子に酒を移しかえている二人を描くが、金銅製銚子は柄のないもので、把手のつく形をしている。

板の間の厨房では(三段)、竈の火の様子をみる者、すり鉢を擂っている者、握り飯をつくる者、汁物の味見する者、男四人が働いている。陶製鍋や包丁、銚子などの厨房器具のほか、食べ物を盛った陶磁器や漆塗りの器物が見える。炊きあがった飯は大きな曲物の容器に入れられている。厨房には棚物があり、そこに漆器や陶磁器がのっている。漆器は、外側に木目を見せ、内部を朱漆塗りとする蝶形の足付鉢もあるが、内側を朱漆塗りとし、外側に黒漆を塗り、さらにそこに朱漆で草花文などの文様を描いた鉢もある。また、総体を朱漆塗とした蝶形足付六角鉢なども置かれている。

もう一場面の厨房では、料理の出来具合をうかがいにきた者と子供に乳を含ませる女の二人の女性、俎で料理する者、鍋の味見する者などの六人の男を描く。俎に向かう男は二人で、一人は魚を、もう一人は鴨を、それぞれ手に金箸と木の葉形包丁を持ち、いままさにさばこうとしている。二人の奥には、七枚ほどの朱漆塗の角切り折敷があり、その上には、やはり朱漆塗りの椀と皿がのっている。水や酒などの液体の入る容器は、いずれも桶物が多い。中世でも室町初期までは、圧倒的に曲物製の器物が多く見られるのだが、桶物が目立つということは、すでにこの作品の成立する時期の室町末期頃になると、桶物が一層普及したことのなによりの証左となろう。

このように、とても文献史料だけではわからないようなことまでも、知ることができるのも絵巻物の大きな魅力である。『酒飯論絵詞』に登場する器物や道具は、現存する工芸品に照合すれば、よりヴィジュアルな生活論や工芸論に迫れようというものである。



『酒飯論絵詞』